

ネパールからタイへ：現代の移住第1世代

——プーケットの仕立屋の事例——

高 田 峰 夫

(受付 2012年5月31日)

はじめに

グローバル化が進展する今日、国境を越えた移動は規模・スピード共に拡大している。その結果、地球上至るところで、思わぬ形の移民コミュニティを見出すようになった。タイにおけるネパール人コミュニティもその一つである。先にバンコクのビルマ系ネパール人の事例を基に¹、その概要について報告した [高田・山本2011]。しかし、バンコク以上に思わぬ場にネパール人たちはコミュニティを形成している。タイの代表的なリゾート地、プーケットである²。ここでは1人の移住第1世代の語りを紹介し、その語りに分析を加えることで、移住第1世代の経験、引いては、コミュニティのあり方と、その特性を探ることにしたい。

本稿は大きく2部に分かれる。第1部は移住第1世代の仕立店経営者M氏自身による語りである³。インタビューは、2011年8月に筆者が彼の店 (Phuket 島, N. Beach) で直接本人から聞き取りを行う形で実施した⁴。筆者はネパール語が話せず、他方、M氏は英語がある程度話せることから、使用言語は英語である。筆者もM氏も英語能力には限界があるため、完全な形とは、とても言えないが、それでも内容的には非常に興味深く、彼の言いたいことはほぼ尽くされているように思う。なお、語りの分かりづらい部分を、必要に応じて筆者がカッコ書きで補足した。また、理解しやすくするため、地名等の固有名詞を中心に注記を施した。

- 1 祖先がネパールからビルマ (ミャンマー) に移住し、本人はビルマ生まれ、ビルマ語で教育を受け、なおかつビルマ国籍を有すことからすれば、彼らについては、本来「ネパール系ビルマ人」とすべきであろう。しかし、本人たちが「ネパール人」(Nepali) エスニシティを強調するため、ここではあえてこのような書き方をする。彼らの主張の背景には、バンコク (ひいてはタイ) の「ネパール人」の中に大きく分けて3つのカテゴリーが存在すること、その3カテゴリーを統合する形の総称が「ネパール人」であることが指摘できる。詳細は高田・山本 [2011] を参照。
- 2 プーケットのネパール人コミュニティを「発見」し、その調整に当たったのは山本真弓氏である。以下のインタビューの場にも同席して、貴重なコメントも加えていただいた。また、本稿の草稿段階でもコメントをいただいた。これらの点を明記し、感謝の意を表したい。なお、本稿の基になる研究は、科学研究費 (基盤研究 B) 「タイに陸路で渡ってきた南アジア系及びミャンマー系移民：地域研究の新たな地平を拓く」(代表：高田) の助成により可能になったものである。
- 3 本人のプライベートに関わる内容が多々あることを考慮し、名前は提示しない。
- 4 直接の聞き取り以外に、考察等では別の機会に聞いた内容も加えてある。

第 2 部は、第 1 部の語りの中から、筆者の問題関心にに基づき、いくつかのポイントに絞って取り上げ、簡単に議論したい。

なお、第 1 部の語りの部分は、内容的に非常に興味深いものの、必ずしも読み易くない。したがって、細かい事実よりも議論の方に興味がある方、または、ネパール人の移動に関する特徴に興味がある方は、第 1 部を飛ばして第 2 部からお読みいただきたい。

第 1 部：M 氏の語り（注釈つき）⁵

1. 生い立ち

私の名前は M。ネパールのプトワル (Butwal)⁶ から 1999 年に (プーケットに) 来て、約 12 年になる。プトワルで 1970 年に (生まれた)。山の方、実家はシャンジャ県 (Shangja District) だ。山の方のそのシャンジャ県にあった古い家から、プトワルの町に移ったんだ。距離は大体 150 km くらい。時間にするると約 6 時間だよ、なぜならネパールの状況では道が良くない、それが理由だ。非常にゆっくり、(せいぜい) 時速 40 km で、約 6 時間かかるんだ。私たちは母と共に町に移ったんだよ。まだ山の方の家はあるよ。でも、大体 90% くらい、私たちは町にいる。しかし、それは山の方を忘れたことを意味しない。そちらにまだ土地を持っている。

私の父はインド軍 (Indian Army) に所属していた。ネパール軍 (Nepal Army) じゃない、インド軍だ。たぶんもう 200 年来、イギリスがインドを統治していた時代から、ネパールとインド、それにイギリスの間で関係合意があることが理由だ。ネパール人は (インド?) 軍に所属できる、ネパール人はイギリス軍に入れる。だから私の父はイギリス (インド?) 軍にいて、地位は super major (上級少佐?) だったが、2002 年に彼はインドで自動車事故により亡くなった。メガーラヤ (Meghalaya)⁷ でだよ。知っている? シロン (Shillong)、ディマプール (Dimapur)、ラキンプール (Lakhimpur)⁸ これが父の活動していた地域だ。アッサム国境警備隊 (Assam Rifle) だ。アッサム国境警備隊はこれらの地域に駐屯するんだ。

5 第 1 部では基本的には彼の語りを重視し、可能な限りそのまま提示する。本文中のカッコ書きは、筆者が補足した部分。また、脚注は、本文の M 氏の語りについて筆者が施した注釈である。また、小見出しは、読みやすさを考え、内容とその区切りを基に筆者が付したものである。イタリック体にはしているのは、ネパール語のローマ字転写。なお、この部分では「私 = M 氏」。

6 プトワル、西部の観光都市ポカラ (Pokhara) から直線距離で南西約 80 km に位置する。

7 メガーラヤはインド東部、バングラデシュの北側に位置するインドの州。

8 シロンはメガーラヤ州の州都。ディマプールはインド北東部ナガランド州の地方都市で、アッサム州からナガランド州への入り口に当たる。ラキンプールはアッサム州北部の地方都市で、この後に登場するジロへのアッサム側の入り口に当たる。

彼はそこで働いていた。ジロ (Ziro)⁹ って知っている？ 中国との国境に近い所だよ。私は行ったことがないけど。でも、父が私に説明してくれた、「自分たちは中国国境をパトロールするんだ、例えばジロ (国境) 線とかね。ジロはいつでもとても涼しいよ」って。ずっとそちらで働いていた。41年間、彼は41年間奉職したんだ。後、ちょうど1年だった。1年後には退職して帰郷しようとしていた。でも、任務に就くために向かっていた時に、(車が) 木に衝突したんだよ、大きな木にね。1人の老人が道に出てきたからね。彼 (父) が運転していた、いや、座っていたんだ、それにいずれも軍の他の4人とドライバー、それが軍のチームで、(任務に) 行く途中だった。老人が、ナガランド¹⁰ の、ナガ民族 (Naga tribe) の人が、道に出てきた。それでドライバーは何とか老人を助けようとした (= 急ハンドルを切った)。その時、車が大きな木に衝突したんだ。父は20分後に亡くなった。私は直接知っているのではなく、他の人 (= 同乗者たち) が私に見たことを、こんなだと話してくれた。他に同乗者2人が重傷を負って、そのうちの一人は後で亡くなった。残りの3人は大丈夫だった、今では何の問題もないと思うよ。でも、私の父ともう1人、ドライバーかその友人か (分からないけど)、亡くなったんだ。2002年のことだ。つまり、9年前だね。

教育？ 私の教育かい？ 私はプトワルで学んだ。1年生か2年生までは山の方の学校でね。町に移ってからは、そこで勉強した、何と言うか、学校、大学。プトワルの “The Sri Maj Kanti Mabi” だよ。私は2044年に “Mabi” で SSC (Secondary School Certificate¹¹, 10年生の学校卒業認定) を得た。2044年？ ああ、それはネパール暦だ。Nepal Sangbad で2044年。西暦では？ 1987年、1987年だよ。私は SSC に合格したんだ。それから私はプトワルのキャンパス、名前は “Lumbini Barije Campus”, で商学を学んだ。仏陀生誕の地ルンピニ (Lumbini) にちなんだ名だよ。私はそこで4年間勉強した。I. Com (商学短大過程) と B. Com (商学学士課程), その両方で、学位は Diploma in Commerce (商学士) だ。その後、私は勉強を続けるためカトマンドゥに行った。しばらくの間ね、あまり自分には良い時期じゃなかったが。それで、勉強が出来なくなった、続けることができなくなったんだ¹²。学士を

9 中国と接するアルナーチャルプラデシュ州の小都市。同州は、インド側が実効支配しているものの、中国と領有権を争っており、実際1962年には戦闘となり、中国軍がアルナーチャルプラデシュ州に大規模に侵攻する事態が発生した。そのため、西のカシミール州と並ぶインド軍の重要戦略地域である。詳しくはグハ [2012] の15章を参照。

10 インドの最も東の州でビルマ (ミャンマー) と国境を接する。ナガ人は、ナガランド州を中心にその南のマニプール州からビルマ北西部にかけて分布する諸民族の総称。その一部はインド東北部に広く移動定住している。先の語りでは事故の起きた場所をメガーラヤ州と述べていたが、事実、メガーラヤ州にも多数のナガ人が居住している。したがって、ここではメガーラヤ在住のナガ人のことであろう。

11 ネパールはイギリス式を踏襲しているため、10年で High School 終了であるが、正式の終了のためには SSC を受験し、それに合格しなければならない。

12 プトワルでカレッジを終え、B. Com (商学学士) になった後、さらに上級課程、恐らくは商学の修士課程に進むために首都のカトマンズへ出て行った。しかし、事情があって、すぐに勉学は断念し

取ってから結婚したんだ、そう、だから働かなければね、勉強できなくなったんだよ。

私は2050年に結婚した。これはネパール暦¹³で、(西暦では)1993年。まだその時は勉強をしていて、小さな金融会社で働いた。でも、結婚時には仕事をしていなくて、(急いで)仕事を得たんだ。仕事を一生懸命しなきゃならなかったし、結婚してしまったからね。仕事を探すのは大変だった。しばらくして、友人のうちの何人かが、もっとも彼は年上だったが、同じキャンパスで勉強していた。それで、彼らが金融会社を開くことになったんだ。「よし、M君、君が加わりたいなら、歓迎するよ」って。一緒にキャンパスで勉強していたけど、彼らは年長、2・3歳年上だったし、ビジネスにどっぷり浸かっていて、お金は豊富に持っていた。幼少の頃から始めて、彼らは商売について考えていた。彼らは商業家系だったんだ¹⁴。彼らが金融会社を始めて、私たちが開設のメンバー、創設メンバーさ。私はそこで働いた、何年だったかな、4・5年? いや、3年間だ。私はそこで3年間働いた。ようやく徐々に状況は良くなった。私とその金融会社で働いているうちにね。(辞めたのは)1997年で、別の会社でもう2年間働いたよ、協力貯蓄でね。ほとんど銀行みたいなものだ。きっと日本にもあるだろう? Cooperative Saving Company Ltd.¹⁵ ネパール語で? “*Nepali Sarkari Sanstha*”だ。わたしはそこで1年間、(いや)1年半働いたよ。

2. プーケットへ

それで、1999年が来たんだ。そう、1999年5月11日、(その日に)私はタイに来た、プーケット (Phuket) にね。まずバンコクに直行し、そこからプーケットだ。一人で来たわけじゃない。義父が一緒だった。ほらここに彼がいる (と、店内の棚に飾られていた写真の初老の男性を指さした)。(それから傍に同席していた自分の妻を指して)彼女の父だ。私は義父と来たんだ、というのもこれには前段があってね。義父はパタヤ (Pataya, タイ南東のリゾート地)で30年以上も働いていたんだ。同じ分野 (仕立て屋)だ。それから彼は (ネパールの)家に戻った。もう働きたくなかった、仕立て仕事を続けるのがね。それから、私たち

なければならなかった、ということのようだ。その事情は、前後の話を総合する限り、B. Com 取得後すぐに結婚したが、勉学を続ける資金的な余裕が無くなり、同時に生活を支えるために収入が必要になった、ということのようである。しかし、それは結婚の時点で本人にも分かっていたはずである。とすれば、そもそもカトマンズに出て行ったこと自体、進学を口実に首都へ出るきっかけにした、との可能性が考えられる。

- 13 ネパールの公式の暦として現在採用されているビクラム暦のことか。狭義のネパール暦は専らネワール人の間に使用が限られているという。
- 14 ネパールの主流を成すヒンドゥ教徒は、カーストで伝統的な従事する職業がある程度決まっている。また、ヒンドゥ教徒とは若干色合いを別にするが、山地系諸民族の中にも、伝統的に商業を中心に従事する、いわゆる商業民族がいる。この年長の「友人」は、商業カーストまたは商業民族の出身だった、ということであろう。
- 15 一種の信用協同組合的な組織のようである。

が結婚して5・6年経ってからのことだが、義父の友人たち、彼らはタイで一緒に働いていたんだが、その2人が突然 Butwal に訪ねてきたんだよ、義父に会いにね。彼らは会いたがっていた、親友だったからね、長年の。私の義父はネパールに戻り、5年だったか4年だったか、ずっとお互いに連絡が途絶えていたんだ。彼らは彼（義父）に会いたくなって、それで、「ネパールに行こうじゃないか」って。彼らはネパールに来たことがなかった。彼らはタイの国籍を得ていたからね。彼らはブトワルに来て、義父に会い、義父は私を彼らに紹介した。彼らの1人が“*Thai Nepali Samaj*”（在タイ・ネパール人協会）会長の Mr. D. L. だ。私は彼に1999年に会った。それが初対面だよ。もう1人が Jonny Mama（ジョニーおじさん）¹⁶だ。当時、まだ私は金融（関係）で働いていた。（彼らの中の1人が）「君がタイで働きたいなら、君はコンピューターについて知っているか、分かるか（Read it?）、よし、それなら君は顧客ファイル、エクセルを更新できるだろう」と言ったんだ。当時、今でも覚えているが、1999年だ。エクセルとワード、マイクロソフト・エクセルとマイクロソフト・ワードだ、当時それが基本コースだったからね。「よし！」と彼らは言ったんだ。かれらはここ（タイ）に戻った。その後、「もし君がタイで働きたいなら歓迎するよ。私たちには仕事がある」と言ったんだよ。で私は考えたんだ、よし一度タイを見てみるもの悪くないな、とね。それで“*Baba*”¹⁷、義父は（タイで）30年以上も働いていた。その彼が「君は行ってみたいのか？」と尋ねたんだ。私は「一度試してみたいです」と言ったんだ。その時には1人だけで来るつもりだったんだ。でも義父は言った、「もし私が行けば、その方が君にとって良いだろう。君には知り合いがないからね。ネパールでたった2日間、私の友人2人を知っただけだ。よし、私が一緒に行こう、そして君のことを助けてあげよう。私には知り合いが多いから、君のことを紹介しよう」ってね。こうしたわけで、結局、私1人で来るつもりだったのが、義父も来ることになった、「君を助けてあげよう」と言ってね。

こうして私と義父は1999年5月11日にバンコクに着いたんだ。それからその後1週間ばかり私たちはバンコクに滞在した¹⁸。なぜなら、そこには義父の親戚が多数いたし、今の私の妻の親戚が結婚して（住んで）いたから、私たちはしばらく滞在したんだ。すると、皆がなぜ（タイに）来たのか私に訊ねるので、「働くためだ、商売をしたいんだ。他の人のために働きたくない。自分たちで計画しなきゃね。どうすれば良いだろう？」（と答えた）。すると皆が、私の親戚たちが、（あれこれ）示唆をくれたよ。その後、私たちはパタヤにも1週間

16 “mama”は、本来は母の兄弟（MB）を示す親族用語。しかし、しばしば拡張され、非親族間でも比較的親しい関係で親しみを込めて「おじさん」と呼ぶ場合に使われる。

17 “baba”は、本来、実父を指すが、これも拡張的に使用されている。

18 この語りの中には出てきていないが、別の機会に地図を参照しながら確認したところによると、バンコクとはいっても、市の東郊、スワンナプーム国際空港に近いオン・ヌット通り沿いの一角であることが判明。

いた。バンコクに1週間、パタヤに1週間、それから私たちは、ここプーケットに来たんだ¹⁹。それから私は彼ら、ネパールに来た人たちに会いに行ったんだ。彼らのうち Mr. D. L. は「君は仕事をしに来たんだね, osanti (?)²⁰。」とは言わなかった。彼のは単なる友好(お付き合い, リップサービス)だった。しかし, もう一人の友人, Jonny Mama は, 「よし, 来なさい。君に仕事をあげよう。私はインターネットをしているから, 何と言うか, 店でだね」。私は「行きたいです」と言った。彼は私に言ったんだ, 「コンピューターを持っているんだが, 知識がない。Eメールや何も使えないんだ。でも, コンピューターは持っているんだよ」。そこで, (私は)「何をお手伝いしましょう?」(と聞くと), 彼は「君は私とヨーロッパから来る客を繋ぎ, そして, 彼らに訊ねるんだ, 『あなたのお国に商売に行きたいんです』, (とね)。そして彼らが何と答えるか(自分に知らせるんだ)。君がしっかり働けば, それで十分だ」と言った。私は, 「分かりました。どこにあなたのEメールがあるんです?」と聞いた。すると, 彼らは私に1000通以上のEメールを渡したんだ(笑いながら), 客からの(Eメールを)。私は彼らを全く知らないよ。彼らってのは, イギリスから(来た人), ドイツから, スイスから, スウェーデンから, ノルウェー, デンマーク, (等々) 沢山の人の人たさ。しかしそれらの人々は, あー, 良く分からないんだが, 彼らは英語を理解した。しかし, ドイツ人, ロシア人, スウェーデン人, 彼らは英語を読みたがらなかつた。彼らは borfield²¹, 感じたんだ, 「おー, これは私たちの言葉じゃない」, たぶんこんな感じかな。私は, 何百というEメールを出したよ。全ての客に, 私の方からこんな(文面の)Eメールをね, 「私は Jonny Mama と申します。Eメールを下さったでしょうか? 私は(これこれ)こういう者です。私はそちらで取引をしたいのです。(服の)サイズを測り, (それをこちらに)持ち帰り, そして(服を)作り, (それを)あなたに送り届けます」。こうして私は(客の)皆にEメールを送ったんだ, 皆に。大体20%くらいは良い返事が戻ってきた, あー, Eメールの, そのうちの20(%)の人たち, 20から30, 40(%)の人たちは, 「OK, いつ来るんだい?」(って返事をくれた)。(そう返事を受けて)「よし!」って私は言った。そして Jonny Mama に尋ねたんだ。彼が義父の友人だから, 義父の友人としての尊敬の念を持っており, だから“Mama”って呼ぶんだ。“mama”ってのは義父の兄弟(WFB)のこことさ²²。で言ったんだ。「Mama, 人々が, 多くの人があなたに会いたがってますよ, ドイツで, スウェーデンで, デンマークで。すぐに行きますか?」。「もちろんだ, もちろんだとも。これを望んでいたんだ。まさにこれを待っていた

19 なぜ義父が30年もの間, 働いた経験があるタイ南東部の都市パタヤではなく, 居住経験のないプーケットに落ち着くことにしたのか, この部分では明らかではない。ただ, 義父が事実上引退してネパールに戻ってきたこと, パタヤには何らの資産や関係者を持たなかつたらしいことを考えると, 義父は単に被雇用者として働いていただけの可能性が強い。

20 この部分, 意味不明。

21 不明。もしかすると, horrified, ぞっとして, か?

22 この説明は, 厳密に言うとは正しくない。注16参照。

んだ。長年、私にはこの辺り (this circle) にだけ顧客がいて、ヨーロッパにはいなかったんだ。そこで、わたしはまた尋ねた。「大まかなところ、いつごろ行くつもりですか?」「2ヶ月後だ、2ヶ月後。この日と、この日」。そこで、私は(日程を)確定した。「よし、この週のうち、ここと、ここと、ここで、2・3人にアポイントメントを入れよう」。こうして私は全ての人に予約を入れ、結局、彼はヨーロッパに行った。それで、結局のところ、私は1年間そこで働いたよ。今でも私は彼を手助けしている、Eメールや何やかや、全てね。そう、Jonny Mama を、だ。

それから、何と言っているのか、そう、その後、私は自分たちで商売をしたくなったんだ。1年後だよ。私は彼に言った、「私はあなたのEメールをやりますよ、晩にね、私の店を終えてから、(夜)10時から12時。2時間あれば、あなたの仕事には十分でしょう。8時間も20時間もずっとではなくてもね」。こうして、私たちは商売を始めた。義父と一緒にね。この店も Jonny Mama のものだよ、以前はね。ただ、ここ(この店)にはキッチンと世話をする人がいなかったんだ、町から遠いから。パトン (Paton)²³とか他の場所からは、ね。昨日会った場所²⁴からは10 km かそこらあるだろ、ね? あっちが自宅なんだ。こっちには世話をする人がいなかったし、大して利益も上げられなかった。「あなたはこの店を手放しますか? なら、私たちがやりますよ」。こうして私と義父がここを、この店を持つようになったんだ。もちろん、一度に支払ったわけじゃない。私たちは徐々に徐々に(払い)、それで(払い)終えたんだ。きっと彼が今でも持っていたよ、彼がね、もしここがそんなに良い稼ぎがあるなら、売ろうと思ったりしなかったさ。きちんと世話をされていなかったし、ちゃんと運営されていなかったんだ、当時は。かなり古い店だからね。彼は店員を1人置いていたんだけど、その男は60 km も離れたところから来て、ここに来るのが12時、それで晩の5時には帰ってしまうんだ。だから、商売にならなかったんだよ。でも私たちはここに9時か10時には来るよ、ここにね。10:30には来るさ。そして、(夜の)11時まで(店を開いている)。だから経営も良いよ。今じゃ、彼に全て支払った、完済さ。こうしてこの商売を始めたんだよ。

3. 義父の死

結局、義父もここにいて、4年間一緒に働いた。義父は大変に厳格な人で、ただここに座っていることなどできず、いつも客の対応をしていた。本当に厳格な人で、まるで軍人みたいだったよ、私の父のように。彼は軍人じゃなかったが。きっと彼が軍に入っていたら、きっと非常に強い男になっていただろうね、何と言うか、そう、肉食獣 (eater)、猛獣 (big eater) にね。軍人は非常に厳格だろう? 「これをしなければりゃならないなら、(さっさと)しろ!」。

23 プーケット島の中の主要なビーチ。

24 インタビューの前日、彼に会ったプーケット市内のネパール系ヒンドゥ寺院を指している。

「できません」とは言えないんだ。「できるなら、やるんだ」、こんな具合に、とても強いのか。それから4年間、私たちはずっと一緒に働いた、私と義父は一緒にね。義父がここにいる、私は集荷や配荷しに市場に行って、というように。そうしていたんだが、ただ、義父はちょっと、何と言うか、糖の（血糖値）問題があってね、そう、それだけだったんだが、糖と血圧が高かったんだ。彼はちょうど61歳だった。2003年のことだよ。私たちは毎日一緒に働いて、（その間）毎月、彼の糖と血圧が高かったから、それに彼は毎日チョコレートを食べたりしていたから、私は彼を連れて毎月医者の所に行っていた。決まった日に、チェックをしに。つまり、いろんな点から見て、普通に過ごしていたんだ、大変すばらしくね。

でも、ある日、彼が亡くなった時のことだが、2003年の10月22日だ。彼がここに座っていて、私は外にいた。というのもその日は非常に雨が激しくて、雨が上がった後、ようやく店に来たんだ。布地や何やかやを持って、出て行ったのが11時、そして戻ってきたのが夕方の5時。彼はその間ずっとここにいた。11時に働き始めて5時まで、ずっとね。それで私が戻ってきた。私は彼に言ったんだ、「さあ、そろそろ休んだ方が良いでしょう。家に帰って下さい」って。すると彼はこう言ったんだ、「それじゃあ休むかな。ちょっと胸が痛むんだよ。部屋に戻って横になるよ。君も店を閉めて、（夜）10時ころには戻るんだよ」ってね。（私は）「心配しないで下さいよ、ちゃんとしますから」（と答えた）。こうして彼は1人で家に帰って行ったんだ。その当時、私たちはモーターバイクを2台持っていた、1人に1台ずつね。（そのうちの1台に乗って、彼は）家に帰った。（家に）戻ると、痛みが少し増して、でも彼は私を呼びたくなかったんだ。彼が言うには、これはいつもの痛みだ、だから彼は家主のところに行ったんだ。家主はこう言ったそうだが、「かなり痛むようだ。一緒に医者の方に行きましょう」と。それで義父は、「そうだね、ちょうど10 km ほどの所にクリニックがあるな」と答えた。彼は一般医、内科医なんだが、彼（義父）はその医者に診てもらいたかったんだ。「じゃあ、私を（その）内科医の所に連れて行ってくれ」。それで家主は義父を連れて行った。そんな風に、行く途中も話をしながらね。もの凄い痛みがあるとか、こん睡したり意識を失ったりとか、そんなじゃなかった（ようだ）。それで現地に着く前に、10 km（走らないうちに）、家主が言ったんだ、「小さなクリニックに行くのはあまり良いとは思えないな。もっと大きな、国際病院みたいな病院に行くべきだよ」って。で、義父も考えた、「そうだね、あんたの言うとおりで。きっとそうした方が良いでしょう」。確かにそこは小さいクリニックで何もなかったからね。せいぜい問診する程度の。それで、さらに20 km、いや22 km 離れたところに向かった。車で、だよ。家主が、私たちは賃貸住宅に住んでいたんだが、彼が車を持っていて、それで義父を乗せて連れて行ってくれたんだ。よくあるクリニックじゃなくて、まっすぐプーケットの町に。もちろん、私はそんなことは知らなかった。だって、彼はごく軽い痛みだ、薬を飲めば治るさ、だろ？（って言っていたから）。そんなに危険なよう

には（見えなかったんだ）。で、プーケット病院，“Bangkok International Phuket Hospital”に（話を）戻すと、義父は61年間というもの、じっとしていたことがなかったんだ、1日もね。彼は腰を据えていたくなかった、いや、病院のベッドで寝ていたくなかった、入院だよ、入院したことがなかったんだ。痛みがあると寝て、薬を飲んで、家に戻る。病院にはいたくなかった、入院が嫌だった。でもその日は痛みが少し強くて、少しだがね。彼は歩けたんだよ、車いすに乗ったりしなかった。彼は自分で医者の方に診察してもらいに行ったんだが、診てもらってからも、まだ痛みがあった。（すると）医者は言ったんだ、（ちなみに）義父の名は I. B. Gurun なんだが、商売上では Mr. Lee と名乗っていたので、医師はこう言ったそうだが、「Mr. Lee、入院しなければだめですよ、ICU（集中治療室）にね。どうしても」と。それで義父は恐怖に襲われてしまったんだ、だって入院しなさいって言われたから。しかも、分かるだろう、普通の病室じゃない、ICU だよ！ 心臓に問題を抱えているのに、ICU に入れて、あー！ それでまた痛んだ。義父は非常に驚いて、「大丈夫ですよ、ほんの少し痛いだけです。普通の治療をしてくれればいいですよ。ICU になんか移りたくない、ごめんだ！」（と言った）。すると医師は「どうしてもそうしてもらいますよ」。それで義父は、いや分からないな、とにかく経験がないから。経験してみなきゃね。ICU に入ってみれば、それは危険なものじゃない、うんと危険なわけじゃ、そうだよ？ ICU に入った人だって出てこれるだろ、良くなって、そうだよ？ でも義父はすごく心配して、心臓が激しく鼓動した（らしい）。医師や友人や家主が言うところによると、一気に汗が噴き出した。それでこう言った「水をくれ」。（ペットボトルを渡されると）1本を飲み干した。そう、それでも義父はICUには入りたがらなかった。「先生、大丈夫です」。「いや、いや、問題がありますよ。大問題と言うほどじゃないが、チョットした問題がね。ICU に入ってもらいます」。それでまた鼓動が激しくなった。そして義父は気を失った、意識がなくなったんだ。それでそれっきり（意識は）戻らなかった。一撃だった。床に倒れたので、医師が人工呼吸と心臓マッサージをしたが、1時間後には死亡した。彼は入院した経験などなく、ベッドで横になる程度だった。だからだ（＝ショックを受けたのだ）と思う。入院を非常に恐れ、ICU はなおさらだった。普通の入院でもダメだったと思う。後で、家主が私にこんな風に話してくれたよ。

そう、夜の9時だった、9時ちょうど。私は、まだ店を閉めずにここにいた。何も知らなかったんだよ。そこへ「すぐに病院に来なければいけない」と（家主から）電話があった。「なぜですか？」、「ああ、君のお義父さんが病院にいるんだ。もうほとんど危篤状態だよ。胸の痛みで苦しんでいた。とにかく来なさい」。「なぜ私に言ってくれなかったんです？」と言ってから、「ええ、すぐに行きます」と話した。私はモーターバイクを持っていた。だからそれで行った。店を閉めて、すぐさまバイクで病院に行ったんだ。ところが、途中、ちょうど10 km 走ったところでガソリンが無くなってしまった。なぜかは分からない。いつも私

は満タンにしておくんだ。私も義父も同じ習慣だった。いつ給油できない事態が生じるか分からないから、いつも満タンにしておくんだ。なのに、あの夜に限って、あちこち走り回って、(店に) 戻るときにはガソリンスタンドはすでに閉じていたんだ。だから給油できなかった。私は「まあ何とかなるだろう。2 km なら走れるさ。明日の朝、給油しよう」と考えていた。なのに、あくる朝は来なかった、すでに時を逸していたんだ。(病院に) 行こうとして、ガス欠になってしまったから、私は友人を呼んだ。彼はここ(店の辺り)にいたんだ。だから、急いで彼に電話した。「すぐに車で来てくれ、いや、君のバイクで。君は私のバイクを何とかしてくれ、私は君のバイクで行くから」って。こうして私は別のバイクで(病院に) 行った。その時、私の義理の、いや、何と言ったかな、義母、父の、いや違う、まあ、姉妹みたいな人だ、その人がここにいる、彼女と一緒に向かったんだ。(病院に着くと) 心電図を見せられて、それはツー、ツー、と何の反応もしていなかった。私がそこに着いたとき、病院の ICU の部屋に、もうすでに99%亡くなっていたんだ。彼ら(医師たち)は心臓マッサージをし、電気ショックを施して、それから、「ええ、彼(義父)は何も言いませんでしたよ。ただ、『ICU は嫌だ』って。その後、もの凄く汗をかいて、水を1本飲んで、それでお終いです、意識がなくなったんです。二度と回復しませんでした」と言った。これが義父の最後の話だよ。他には彼は問題なかった。健康だったよ。ちょっと太っていて、でもそれほどじゃなかった。それにまだ61歳だった。義父がなくなったのが61歳の時、父が事故で亡くなったのは、まだ57歳だった。

4. 現在に至る

ともかく、父(義父)がなくなって、私はここに戻ってきた。「ようし、ここで何とかやれるんなら、何とかしよう。そうしなきゃネパールに戻るしかないんだし」。私はネパールにも電話を掛けた。何が起きたのか言うのは、非常に言いづらかった。というのも、タイに来てから4年間で、私はネパールに2回戻った、そうだったよね?(と夫人に確認)。2回、3回(「3回よ」と夫人がいうと)、私はネパールに3回戻った。99年に来て、2003年までに私はネパールとの間を3回行き来したんだ。ところが、義父は一度も帰らなかった。彼は、「私は来年戻るよ、4年か5年したらね」と言っていた。ともあれ、私は話をした、何とかね。皆泣いていたよ。それで妻が言ったんだ、「いいわ、私が行って手伝うから」って。その後、義理の兄弟が手伝いに来てくれた。でも、彼は、何と言うんだろう、時々、psycristic (psychological?), ああ、分からない。科学用語が思い出せないな。彼はこの種の商売が合わないんだ。「難しいよ」って言うんだ。客が来ると、誰もが同じ考えをするわけじゃない。ある人は「これは良い」って言うし、別の人は「これは良くないね」って言う。まあ難しいさ。結局、義理の兄弟はここに3・4ヶ月いたけど、商売が上手くいかなかった。きっと関

心がなかったんだろうね、帰って行ったよ。その後も2・3度来たけど、仕立屋の仕事に大して関心を持てなかった。

結局、2005年に私は妻を呼び、彼女がここに一緒に来たんだ。当時、妻はまだネパールにいた。その後、私が彼女をここに呼んだんだ。彼女は、大体半年ここにいて、後の半年は子供たちとネパールで過ごす。今では私もネパールに行き、1カ月は子供たちと過ごす、こんな風かな。そんな形で始まって、今までずっと続いているよ。

5. ネパール人移住者と組織

(私たちは) 今ではここでも徐々に知られるようになった。社会活動に携わるようにしているからね。社会活動や、多くのイベントにね。ネパールから楽団を呼ぶようなイベントの手配もしている。楽団を呼んでライブ・コンサートを開いたのは、タイでは私たちが初めてだよ。Mr. Adrian Pradhan の“1974 AD”という名前のバンドで²⁵、そのコンサートをここプーケットで組織したんだ、初めてね。私たちは、こんな音楽イベントや社会活動に関心を持っている。そうこうするうちに、2008年に私はNRN (Non Resident Nepali, 在外ネパール人[協会])のプーケット(支部)の会長になった。そして今年2011年にはタイ全土のNRNの会長になった。2010年まで、NRNはバンコクに(タイの)本部があり、プーケットに唯一の支部があるだけだった。当時(私は)プーケットだけの会長だったが、2011年5月28日、私は(全タイNRNの)会長になったんだ。それから(今まで)3カ月の間に、私たちはカオ・ラック(Khao Lak, 西Panga県のリゾート地)、コ・サムイ(Ko Samui サムイ島、南部のリゾート地)、クラビ(Krabi, 同じく南部のリゾート地)の3か所に支部を開いた。かつてはプーケットに支部があるだけだったが、私が会長になってから、ここから北に100 kmほどにあるカオ・ラックに支部をオープンし、それから最近8月14日、いや13日だ、コ・サムイに支部を開いた。そう島だよ、知っている? 私たちはそこから車で移動して、8月14日にはクラビで支部を開いたんだ。つまり、今では私たちはタイ全土に4支部と(バンコクに)中央委員会があることになる、NRNのね。本部はバンコクだよ。あ、そうだ、バンコクにも1支部あった。今じゃ5支部だ。3カ月の間に5支部だよ。それで、今は8月だから、9月、10月、11月、12月、そうだな4ヶ月のうちにタイ中に支部を作りたいね。今、チェンマイとチェンライに計画している。ネパール人が沢山いるんだよ。1000人以上いるかな。チェンマイに1支部、チェンライに1支部。それからパタヤ、それにフア・ヒン(Hua Hin)にも。メー・ソト(Mae Sot)もだ。5、これから4ヶ月間で、2011年中に、さらに5支部作りたい。これがアジェンダだ、約束のようなものだね。ともかく、2011年中にはタイ全土をカバー

25 Wikipedia (English) によれば、“1974 AD”はネパールで最も成功を取めたロックバンドであり、Adrian Pradhan はバンドのリード・ヴォーカル兼ドラマー、とのこと。

するように支部を作り、本部がそれを統括して、情報を流す、そんな風にしたいいね。

各支部はうまくいっているよ。でも、やらなけりゃならないことは沢山ある。まだ支部ができただけで、成功したとは言えないからね。各支部にメンバーを増やさなきゃ。メンバーを持てば、チョットした声になる。もし1万人になれば大きな声だ。何だってできるさ、だろ？ 私たちは我がタイ・ネパール人協会 (Thai-Nepali Society) を支えることができる、NRN 協会 (Non-Resident Nepali Society) でね。NRN 協会は兄だ。そしてタイ・ネパール人協会は弟のようなものだよ。だって、タイ・ネパール人協会はタイだけにしかない。しかし、NRN は世界中にある、今は58カ国に。今年の末までには、たぶん全部で72になるんじゃないかな。だから、私たちはNRNの中央ICC委員会での支部ということにもなる、ここがね。というわけで、今、私たちは会員(獲得)のために働いているんだ。もっと大きくなれば、もっともっと支部やメンバーが増えれば、私たちの声をネパール政府にも届けることができる。タイからネパールへ、ネパール出自のタイ市民(の声を)。ネパールのヴィザを取るの大変なんだ。彼らは何かと詮索するんだよ。なぜヴィザがいるんだ(ってね)? だから私たちは政府に頼むのさ。物事を進めるために。先月、いや失礼、今月だ、私たちは要望書を大使館に届けたよ。タイのネパール大使館にね。渡したよ、代表してね、「我々の子供たちはタイ出身で、タイ市民ですが、出自はネパールなのに、ネパールに行くことが難しいのです、修学ヴィザを取ることが。彼らはすでにネパールで学んでいます。学校に入学を許可されているのです。(しかし)この3-4ヶ月もずっとヴィザの事で悩まされています。ヴィザがないため、まるでオーバー・ステイのようです。ヴィザの更新がなされないのです。そのため、このように大使館に、『なぜヴィザが更新されないのでしょうか?何か書類が必要であれば、(または陳情の)代表団が必要なら、そういたします。おっしゃってください』、とね」。ネパールの外務大臣宛てじゃないとダメなんだ。なぜヴィザを得られないのか?彼らは学生だ、適法な学生だ、まさしく学生だ、そうでしょ?当然ヴィザが得られるはずだ。手紙を書けるから、書いたんだよ。すでに8月の2日にね。たぶん今は手続き中だろう。だって、世界中どこだろうと、ネパール(出身)ならそれで十分だ、だろ?ネパール出身、国はどこだろうと、アメリカ生まれでも、カナダ生まれでも、たとえ日本だろうと、彼らはネパールに出自がある。彼らにだって国家に対する権利がある。彼らが彼らの国を訪れたいなら、世界中から来たいなら、自由にヴィザが出るのが良いだろう?国外の6000万人の人々、いや、失礼、600万人の人々が国を出て(外国に)居住している。彼らはヴィザを必要としていない。私がネパールのパスポートを持っていれば、ヴィザなんか必要ない。しかしネパールのパスポートを持っていない人(=ネパール出身者を祖先に持つ人)がヴィザなしでいつでもネパールに行き来できるなら、それは我ら(=ネパール)の観光セクターにとっても良いことだ。なのに彼ら(政府の役人たちは)はそう考えない。いつも金、金、金、だ。

だからこそ私たちは政府に要請を行うのだ。

6. 子供たちの教育

私には子供が2人いる。息子2人だ。1人が17歳、もう1人が12歳。私、と言うのは違うな、私たち、だ。私たちには2人の子供がいる。もうこれで十分だ。2人で十分。大変なんだよ。というのも、ここではネパールよりも教育費が少々高い。英語だ、英語教育、流暢な英語、それが学校では話せるようにならない。子供たちをインターナショナル・スクールに入れようとする1人に月額1万バーツ、2人で2万バーツだ²⁶。ところが、わがネパールならば、いくらだ？ 月に3000バーツ、それで終わり。全て込みで、だ。寄宿舎じゃないよ。学費、補習、その他を入れて全てで、だ。月額3000バーツ、2人で、だよ。ここだと月に2万バーツ。これだって通学してで、寄宿舎じゃないんだ。だからさ。それに（ネパールなら）英語も素晴らしい。良い英語、非常に国際的な英語。一部の人々、先生たち、彼らはネパール出身だが、一部はダーズリンから来る。ダーズリン（の人）は英語が上手いんだ。だから彼ら（子供たち）をネパールで学ばせているんだ。プトワルで。プトワルには英語で教育する学校が多いのか、って？ 沢山あるよ。“Oxford English Boarding School”，そこで上の子は学んでいるんだ。（横から夫人が、Secondary、と修正を入れる）。そう、“Oxford Secondary English Boarding School”。今、上の子は寄宿舎に入っている、寄宿生だよ。最終資格認定取得レベルの学年では全員が寄宿するんだ、1年間。1年生から9年生はそうする必要はない、義務じゃないから。しかし、最後の9年生から10年生に上がると、つまり10年生は、寄宿しなければならないんだ。そうするのが良いからね。現在、最終試験の最中さ。だから学校に寄宿しているんだよ。その期間だって大して高くはない、約5000バーツ、月に4000-5000（バーツ）。何もかも、食事も（込みで）。寄宿しているのは1人だよ、もう1人（=下の子）は通っている。そう、プトワルで。（以下、略）

7. 協会（*Samaj, Society*）と連盟（*Sangha, Association*）

タイ・ネパール人協会（*Thai-Nepali Samaj*）はこのプーケットだけ（*Oh, Thai-Nepali Samaj ei Phuketer matray*）、タイ・ネパール人連盟（*Thai-Nepali Sangha*）はタイ全土だ²⁷。タイ・ネパール人連盟、（その英名）*Thai-Nepali Association* は全タイで、タイ・ネパール人協会はその一部だよ。例えば、タイ・ネパール人協会では、*Phuket Thai-Nepali Society, Krabi*

26 インタビュー当時の交換レートで1バーツ≒3円弱であった。

27 この部分のみは、山本真弓氏がネパール語で質問し、それにM氏が一部はネパール語、大部分は英語で答える、という変則形式のインタビューである。M氏がネパール語で話している部分は、必要に応じてローマ字（イタリック）で示してある。

Thai-Nepali Society, Ko Samui ……のように。しかし、タイ・ネパール人連盟 (*Thai-Nepali Sangha*)、Shangha は連盟 (Association) を意味する、これは全タイだよ。連盟も2010年に始まったんだ。始まったばかりだよ。以前、連盟はなかった。私たちは大きな連盟を持っていなかったんだ。つい先のシーズンからできたばかりだ。

連盟と協会は、まさに一体さ (*Sangha and Samaj na ho, they are really together.*)。以前は別々の協会だったんだよ、いいかい？ 1つの協会、2, 3, 4, 5, それが一体化したんだ。「よし、一つ中央委員会を作ろうじゃないか、NRN みたいな」って。それが一つの中央委員会、つまり連盟で、(後は) 小さい協会だ。でも、今では一体になって、もうバラバラじゃない。規則、制約、みんな一緒だ。ちょうど、NRN 中央委員会があって、NRN に憲章があれば、支部も同様にする。それらには全て同一の憲章があり、全てそれに従わねばならない。何かで共同の作業をしなければならない時には、中央委員会次第だし、一緒に協力する。それと同じようなものさ。大して違わないよ。皆が同じようにするのが良いのさ。皆が改善する、改善はしなきゃね、社会化だ。以前、私たちは何も知らなかった。当時はバラバラだった。同じ家族でさえ、バラバラな健康、バラバラな心、差異、そんなだった。しかし今、全ては改善され、発展したんだ。皆が社会化し、そして、協会が連盟になった。NRN はネパール発の最大の連盟だよ、ネパール国家の。先に話しただろう？ 世界中では大使館以上 (の存在?) で、私たちの組織以下ってことはないのさ。私としては、これから将来も上手く機能してくれることを願うね。この10月12, 13, 14日には会議を開催する。ネパールでの総会だよ、毎年、ネパールで。さあ、お終いだ。

第 2 部：考察

第 1 部では、M氏の語りを聞くことで、プーケットに暮らす在外ネパール人 1 世の生活世界と経験を知ろうとした。そこからは実に多様な問題が見いだせるが、ここでは、若干の論点に絞って検討してみたい。

1. 移住における教育の役割

まず注目してみたいのは、移住において教育が果たす役割である。M氏は、故郷のプトワルで4年制カレッジを終了し、B. Com (商学学士) を取得した。さらにその上の教育を目指して首都のカトマンズに出て行ったものの、それは生活費を稼ぐために挫折してしまっただが。1970年生まれで、インタビュー時に41歳になるM氏だが、ネパールの教育事情全般を考えると、かなり高い教育を受けてきたことになる。彼は教育と学歴を基に、年上の「友人」が設立した金融機関に就職した。どのような金融会社なのか、話の中には出てこないが、簡単に

設立されていることからすると、いわゆるノン・バンク系統であろう。さらに、そこで3年働いたのち、信用協同組合のような金融機関に転職している。それらの機関で働くうちに、彼は金融についての知識を得たばかりでなく、基礎的なパソコン・ソフト（ワードやエクセル）の使用を覚えた。これが、プーケットに移住するにあたって、Jonny Mama の店で雇われる際の決定的なスキルとなったのである。M氏は、詳しく語っていないが、カトマンズからタイへの移住を決断するに当たり、高等教育を修了したこと、金融機関で働いた経験、基礎的なパソコンの知識等が、彼にとってポータルな資産となっていたことは間違いない。曖昧な口約束だけを頼りに移住と言う重大な決断をしたように見えるが、彼には高等教育修了の学位と金融知識、パソコン・スキルがあり、恐らく、それらを基に、そこに人的なネットワークをかみ合わせれば、移住当初の手掛かりは掴める、との大まかな見込みがあったはずである。そうでなければ、当初考えていたように、自分一人で全くの未知の世界であるタイへの移住を決断したかどうか、疑わしい。幸いにも、タイでの居住経験がある義父が同行してくれ、なおかつ、義父の友人の1人が仕事を提供してくれる、という幸運もあって、順調な移住の滑り出しになった。しかし、こうした「幸運」も、M氏が一定以上の教育を受け、この場合にはパソコン知識を持っていたこと、なおかつ、英語でのEメールのやり取り、つまりは、英語での読解・記述というスキルを保持していたこと、こうした条件が整わなければ、果たしてどの程度まで作用したか微妙なところであろう。

M氏が、教育の重要性に関して、真剣に考えていることは、彼が自分の2人の息子の教育について語っている部分でも明らかになる。息子たちを「英語で」教育すること、なおかつ彼らに「良い英語、非常に国際的な英語」(good English, very international English)を身に付けさせることを、強く意識している。その手段として、息子たちを出身地であるネパールのプトワルにある英語で教育を行うハイスクールに送りこんでいる。それも、タイでは、英語で教育を行うインターナショナル・スクールに通わせると非常に費用が掛かる上に、それほど望ましい教育効果が上がらないと見込まれること、他方、ネパールでなら、インドのダージリンで教育を受けた先生から「本場仕込みの英語」²⁸での教育を、比較的安い費用で受けさせることが可能なこと、こうした違いを十分に計算した上で、である。その目的について、M氏は「子供たちの教育」の部分で直接語っていない。しかし、「ネパール人移住者と組織」の部分の終わりに近い方を見ると、明らかに、海外、それも欧米で活躍するネパール人とその子供たちを念頭に置いて、ネパール政府からのヴィザ発給問題を語っている。その

28 インドのシッキム州に位置するダージリンは、旧英領時代から多数の寄宿学校があり、それらではイギリス人、またはイギリス人から教育を受けたインド人教師たちが、英語を媒介とする授業を行っていることで知られている。恐らく、そうした教育を受けた人が先生として授業を行っていることを指して、M氏は、「良い英語、非常に国際的な英語」と言っているのである。

語りの内容からすると、恐らく、M氏は、いずれ子供たちの活躍の場を海外、とりわけ欧米に求めること、もしくは、子供たちがタイなどのアジア諸国を舞台とする場合であっても欧米系の人々と関係する職種等に就くこと、これらを念頭に置いているのは、ほぼ間違いないと思われる。つまり、ここでも英語による高等教育が、移住を前提にして考えられているのである。ここでは、「英語による教育」がいわば「移住のためのスキル」とも言える形で位置づけられていることになる。

2. グローバル化

M氏は、元々ネパールの田舎町で生まれ育ち、成人後に首都のカトマンズに移動した。この辺りまでの動きは、ローカルな青年たちの成長過程と軌を一にする。確かに、実父の人生を見ると、インドと中国の対立、そこにネパールの軍人が関わってゆくプロセス等が見られるが、あくまでも地域限定的な関係性の中に彼が位置していたことは明らかである。しかし、その後の彼の動きには、グローバル化の影響が色濃く表れる。

まず、そもそも彼がネパールを出てタイに向かうきっかけになったのは、義父が30年間タイのパタヤで働いていたこと、帰国後の実父をパタヤ当時の同僚が訪ねてきたこと、その同僚たちがM氏をタイへ誘ったこと、等である。ここには、すでに南アジアを越え、東南アジア世界と南アジア世界とのダイナミックな関係が大きく関わっている。

さらに、プーケットに移動した後、最初に従事した Jonny Mama の店での仕事では、彼の役割は、Jonny Mama の店を訪れたことがある欧米諸国の顧客らとのインターネットを介したEメールのやり取りであった。その際の使用言語は英語である。それまでの Jonny Mama の店の経営実態は、あくまでもプーケットというタイの観光地で店を開いているだけ、その顧客がたまたま店を訪れた欧米諸国の旅行者、との段階に留まっていた。しかし、M氏が関わるようになって以来、経営に根本的な変化が生じている、つまり、M氏が大量に届いていたEメールを処理し、それらに返信を出し、さらには Jonny Mama が欧米諸国を回って積極的に注文を取りに行く調整役を担うことで、Jonny Mama の店は、プーケットに所在する 1 仕立屋の枠を超え、欧米に多数の顧客を抱えるグローバルな仕立屋へと変貌を遂げるのである。この変化には、M氏のパソコン能力（特にインターネット）と、恐らくは「英語で読み書きできる能力」が大きく関わっていた、と推測できる。実際、一般的に、従来のネパール人商人たち（広く言えば、ネパール人に限らず、小規模な商店の店主や店員）の英語能力は、耳で実践的に習い覚えた「ブローケン・イングリッシュ」の域を出ないモノである。そのため、店に来訪した欧米の顧客とその場では何とかやり取りをするものの、帰国後の顧客と連絡を取って、さらなる関係を結びネットワークを広げることはできなかった。しかし、ネパールで高等教育を受け、金融機関で働いた経験のあるM氏が加わることで、インターネットの

「Eメール」と「英語」を媒介に、「欧米世界」への道筋が浮かび上がったのである。この転換は、潜在的には非常に大きな意味を持ちうる。なぜなら、それまでの彼らの世界が、自らの「居住」を軸とする世界に限定されていたのに対し、M氏が加わった後の世界は、居住とは切り離された世界であり、当初は西欧に注文取りの訪問を行っているものの、仮にこれをインターネットによる受注方式に転換できるなら、まさしく「世界規模」、それも地理的な距離を問題としない世界に広がり得る可能性を秘めているからである。M氏は1年でJonny Mamaの店から独立を果たしているが、恐らくはそこにもグローバルにつながる彼の能力が大きく関わっている可能性が高い。

3. 経営の実態

語りの中には断片的にしか出てこないが、明らかにM氏には仕立てに関する経験がない。その彼がどのような経営を行っているのだろうか。彼の店に入ってみるとすぐに分かるが、店内には縫製を行う部門がない。具体的には、店主が自ら行うか、店員が行うかは別にして、そもそもミシンや裁断を行う作業台等が一切見られないのである。あるのは、壁に所狭しと立てかけられた服地の反物、応接用のソファのセットと客が暇をつぶすためのテレビ、それにパソコンが載っているM氏の事務机、縫製用のボディが1体。これだけである。そもそも店には店員がいない。いるのはM氏夫妻だけである。

夫妻の仕事ぶりは、なかなか興味深い。店の表に張り出されている写真や文字の釣り込み広告を見て、ビーチ・リゾートに滞在に来ている顧客が興味を持って店内に踏み込むと、英語でニコヤカにセールス・トークを話しかける。そこで興味を失って出て行く客も多いが、一部の客は洋服を眺めることに関心を示す。すると次々に客に対して提案を行うのである。具体的には、ファッション雑誌を開いて、そこにあるモデルたちの纏う服を見せる、またはパソコンに収められているこれまでの顧客が眺めた服を着ている姿を次々に示す、等により、まずは顧客にイメージを持たせる。そこでさらに関心を示すと、次には具体的な生地を提示して顧客に実質的な質感を確認させつつ、色や服地の種類についての顧客の好みや関心・希望を引き出す。この段階まで来ると商談は佳境に入る。後は、細かいデザインや価格、引き渡しの期限等を詰め、採寸を終えるだけで注文段階は終了する。注文を終えて顧客が店を出ると、M氏も店を出る。語りの中に断片的に語られているように、服地を縫い子である地元の人がいる村まで採寸したサイズを記した紙と共に持ってゆくのである。縫い子はすぐさま仕事に取り掛かる。M氏は仮縫いが終わるとその服地を引き取り、再度店を訪れた顧客に着てもらい、細部の調整を終える。それを再び縫い子の下に届け、後は仕上がりを待って引き取る。顧客が仕上がりに文句を言わなければ、出来上がった服を顧客に引き渡して取引完了となる。リゾートに短期滞在するリゾート客が相手なので、急ぐ場合には翌日仕上げも

可能なようだ。

ここで注目されるのは、顧客の身体に合わせて採寸を行う以外、夫妻の行う作業には仕立屋としての特別の技能的特徴が一切見られないことである。行っているのは専ら接客業務であり、商品としての服地や完成品の服を別の商品と置き換えても、商売は成立する。その意味では、M氏たちはあくまで接客業・小売業を行っているにすぎず、たまたまその取り扱い商品が服地・服であるというにすぎない。また、経営の面から見れば彼らはあくまで仕立店「経営者」であり、業務の内容から言えば営業活動が主になっている。ここにはタイ政府の政策が関わっているようだ。M氏の説明によれば、タイで外国人が商売を行う場合、基本的にはタイ人を直接的・間接的に雇用することが条件となるという。この場合で言えば、縫製業務をタイ人に委ねることにより、タイ国内に雇用を生むわけであり、その限りにおいてM氏たちや他のネパール人仕立屋の存在が許容される。したがって、M氏たちが行っている分業制は、M氏たちネパール人の側の経営戦略ではなく、むしろホスト国であるタイ政府の政策によって規定されていることになる。言い換えれば、ホスト国の定めた条件の中で移民であるネパール人たちは生存戦略を作り上げ、それがこのような経営と営業活動はネパール人、縫製実務はタイ人、という分業体制になったのであろう。さらに、M氏たちが扱う服地は、一部はタイ・シルク等のタイ国産であるものの、多くはイタリアやイギリス等の西欧製である。これは顧客がそれを好むからである。顧客が求めているのはタイの現地を着るための衣服ではない。もちろん、そのような例もなくはないが、大部分の顧客は故国で着るために出来上がったスーツを土産として国に持ち帰る。そのため、タイ・シルクのような一部の高級素材を除けば、むしろ西欧製のウール等の素材の方が好まれるのである。西欧産の素材を西欧から輸入し、それをプーケットで仕立て、顧客は欧米各国に持ち帰る。つまり、ここでM氏たちが行っているのは、タイのリゾートを舞台にはいるが、実質的にはミニマムな規模の「加工貿易」なのである。

あくまでも加工地である以上、それ自体のブランド力は不要である。非常に興味深いことに、ネパール人たちが経営する仕立店には顕著な特徴がある。店名には、何かしら西欧のファッション産業を想起させるような命名がなされていることである。しばしば見かける例を挙げると、代表的な男性のファッション大国であるイタリアから取った「ヴェルサーチ」、「ミラノ」等の店名があちこちに見られる。しかし、それらはいずれも本来の「ヴェルサーチ」や「ミラノ」とも無関係であることはもちろん、同じ店名を掲げる店同士の間に関係もほとんどない。西欧の（主に男性）ファッション²⁹からネパール人たちが連想する「イメージ」を

29 ネパール人たちの多くは男性である。M氏のように妻を同伴している例であっても、彼の妻のように実際に店頭に立つことはほとんどない。ネパール人たちの店に行くと、ほぼ完全に「男の世界」である。恐らくそれが大きな理由だろうが、一応女性のファッション誌からドレス等の切り抜きをして飾っているものの、取り揃えている布地の多くは男性向け、顧客の多くも男性である。

お互いが追及し、その「イメージ」に合う既存のブランドないしは地名をそれぞれが勝手に採用した結果が、あちこちに見られる「ヴェルサーチ」や「ミラノ」という店名なのである。もう一つ興味深いのは、彼らの多くが商売向けの名前（個人名）を持っていることである。その多くは西欧風の名であるが、必ずしもそればかりとは限らない。語りに出てきた例からいえば、M氏がプーケットに来た当初、彼を欧米系顧客担当の「通信係」として雇ったのはJonny氏である。他方、M氏の義父は、商売上はMr. Leeを名乗っていたが、これはどことなく多数の移民を輩出する中華系を連想させる命名である。また、顧客に合わせ、彼らの振る舞いもどことなく欧米風である。店で彼らが身につけるファッションもネパール人らしさを抑え、限りなく欧米風にする³⁰。いずれも垢抜けないのが少々残念ではあるが。タイのプーケットでネパール人が商売をしているにもかかわらず、表面的にはタイもネパールも表に出ない、というよりは、むしろタイ色もネパール色も極力消し去ろうとする。彼らの行っている商売の実態が、専ら欧米の顧客を対象にし、欧米の舞台で着られる商品を加工生産する「加工貿易」であることを考えれば、これらは彼らなりに合理的な選択であるのだろう。

4. 移民社会ネパールと観光地への移住

近年のネパールは多数の移民を輩出する移民国である。しかし、それが今に始まった新しい現象であるわけではない。英領インド時代からの「グルカ兵」の世界を股にかけた活躍は広く知られているし、ネパールの商業民族であるタカリーを調査した飯島は、すでに1958年の最初の出会の際にタカリーの広い商業活動の一端を見て感嘆した記憶をその著書に記している〔飯島1982〕。M氏の場合で言えば、彼の実父はインド東北部に駐屯する軍に勤務し、彼の義父はタイのパタヤで30年間も働いていた。しかし、こうした姿が必ずしも一般的であったわけではなく、多くの人々はネパール国内、せいぜい近隣地域（主にインド北部）を生活の舞台としていた³¹。

近年になって、国内の政治的混乱を避け、また経済的な機会を求めて、多数のネパール人が海外を目指すようになってきている³²。M氏のように多数のネパール人が仕事やチャンスを求めてタイにもやってくる。ただし、彼らは何の当てもなく移動するわけではなく、何らかの

30 一般的には、パリッとしたシャツとパンツの組み合わせが普通であるが、そうでない場合もある。例えば、M氏は、店では必ずのようにカウボーイを連想させるような、飾りの革紐が付いたシャツとジーンズないし皮パンツを着用していた。いずれにしても、ネパールやタイを連想させる服装は店では着用しないのである。

31 山地系のネパール人にとっては、元々はチベット（主に南部）も生活の舞台であったが、中華人民共和国成立後、チベット国境が封鎖され、自由に交通できなくなっている。

32 彼らは、しばしば危険を冒してでも機会を求めて動くことがある。湾岸戦争後のイラクで「戦場出稼ぎ労働者」の実態を知るために潜入取材した安田は、クウェートでの仕事探しの日々から、潜入したイラク軍基地建設現場まで、様々な場所で出会った人々のことを記しているが、その中にも随所にネパール人が登場する〔安田2010〕。

伝手なり見込みがあつて移動する。そのため、結果的にネパール人が集中する土地が出現する。M氏がNRNの支部を設立したカオ・ラック、コ・サムイ、クラブ、本部のバンコク、またはこれから支部を設立する場所として具体的に言及したチェンマイ、チェンライ、パタヤ、フア・ヒン、メー・ソト、これらの場所は全て広義のネパール人が集中している場所であろう。このうち、メー・ソトはビルマ国境に位置し、ビルマとの重要な交通の拠点であることを考えると、そこに住むネパール人たちの多くは、実質的にネパール系ビルマ人であると推測される³³。他方、それ以外に挙げられている地名は、首都のバンコクを除けば、興味深いことに全てタイでも有名な（または有名になりつつある）リゾート地である。M氏たちのようにネパールから直接移動してきた人々は、こうしたリゾート地で世界中の観光客を相手とするビジネスに食い込むことで、タイという不慣れな環境に順応しようとしているのであろう。これは彼らなりの戦略とも言える。通常の場合であれば、現地のタイ人が同じ現地のタイ人を相手にタイ語で商売を行っており、それに対して資本も特殊技能も持たないネパール人の参入する余地は小さい。しかし、リゾート地で欧米系を中心とする外国人観光客相手の商売であれば、タイ人と競合することも少なく、英語を駆使し、コミュニケーション能力が高いネパール人には十分参入の余地が開かれている。多数の観光客が集中するという意味ではバンコクも一大観光地である。ネパール人たちは、観光地での観光客相手の商売に特化することで、タイの中に居場所を作り上げていることが考えられる³⁴。

ただし、誰でも移動できるわけではないのはもちろん、仮に移動しても定着できない人がいる。言い換えれば、グローバルな移動の時代に明らかに向かない人がいる。その典型例として彼の語りに出てくるのは、義理の兄弟（brother in law）である。義父の死後、その穴を埋めるためにプーケットに来たものの、商売に合わなかったのか、プーケットと言う未知の土地に合わなかったのか、そのどちらか（あるいは両方か）不明だが、とにかく精神的に参つて、結局、帰国してしまう。代わってやって来たのが、M氏の妻である。彼女は順調に新しい環境に馴染み、今ではネパール人女性の典型的な服装であるサリーやサルワル・カミーズ³⁵を捨て、シャツにジーンズという欧米化したスタイルで日々接客にいそしんでいる³⁶。この兄妹（姉弟？）の例からも典型的に伺えるように、移住には男女差を越えて明らかに向き不

33 ただし、この点は未確認であるため、今後、検証が必要であろう。

34 この点についても、さらに検証する必要がある。

35 ダボダボのパンツの上に膝丈ないしそれ以上の長い上着を重ね、その上から緩やかにスカーフを巻くスタイル。ネパールではクルタ・スルワール、バンジャービー・ドレスとも言うようだ。

36 こうした例は、プーケットのネパール人社会でも少数派である。ヒンドゥの祭礼の集まりがあり、ネパール人たちが建立したヒンドゥ寺院を訪れたが、その場に多数集まった女性たちの圧倒的多数はサリーないしサルワル・カミーズ姿であり、子供たちや未婚の若い女性を除けば、成人女性で欧米化したスタイルの服装をしている人はほとんど見られなかった。祭礼の場であることを考慮しても、彼女の「適応」は、かなり例外的なものようである。

向きの個人差があり、その差が新環境への定着に大きく作用するように思われる。

5. 移動ルートとネットワーク

グローバル化時代の人の移動については、研究者の間でも理解の仕方をめぐって議論が分かれる。若干の例を挙げるなら、「ナショナルな網状化」[ヘルド、他：2006]と捉える議論もあれば、「トランスナショナルな市民社会」[ベック：2005]を想定する議論もある。プーケットのネパール人たちの場合はどうだろうか。

M氏の場合、タイへの移住に際しては、先に移住していたバンコク在住の親族の下で1週間滞在し、そこで情報収集と意見聴取を行い、さらに義父がかつて30年の移住生活を送ったパタヤの地を訪れた後、プーケットへ向かっている。話の中に出てこないが、雑談の中ではバンコクの親族とはしばしば行き来をしている様子がうかがえた。ただし、バンコクとは言っても、それは巨大都市バンコク全体を意味するわけではないようだ。ここではバンコク、と簡単に触れられているが、地図を基に詳しく確認したところ、具体的にはバンコク市東郊、市の中心部よりもむしろスワンナプーム国際空港に近いオン・ヌット通り沿いの一角に位置する、M氏の親族が多数居住する地区のことを指示して「バンコク」と呼んでいるのである。しかも、空港から直接、当該地区に向かうため、バンコク市については、中心部の繁華街については一定の見聞があるものの、それ以外についてはM氏に意外なほど知識がない様子であった。ここから浮かび上がるのは、「ネパールとタイ」という大きな繋がりどころか、「カトマンズ…バンコク…プーケット」という一般に想像しがちな広がりのあるつながりでもなく、むしろもっとミクロな、「ブトワル…(カトマンズ経由)…オン・ヌット (バンコク)…N・ビーチ (プーケット)」という、いわばピン・ポイントの点と点を繋ぐ結びつきである。人びとは、国家や大都市を跨ぐ移動をしているというよりも、むしろ、それらの小さな点と点の上を飛び跳ねるかのごとく移動してゆく、というのが実態に近いようである。その際の「点」とは、実際に親戚・友人・知人がそこに住んでいる小さな場である。したがって人びとは、知己の人々のいる場から場を、転々と移動して歩くことになる。こうした姿は、先に触れた「ナショナルな網状化」や「トランスナショナルな市民社会」とは若干イメージが異なるようだ³⁷。

他方、個々人の移動を越えて、異郷で彼らを大きくまとめているのは「ネパール人」という括りである。先に別稿で指摘したが[高田・山本2010]、バンコクでは通称「ネパール人」とされている中に、①ネパール出身者がビルマ（その多くは英領期のビルマ）を経由し、早いうちにタイに入った人々の子孫でタイ国籍の所持者、②主に英領期にビルマに移動・定着

37 この点は、もう少し詳しく調べてみる必要がある。

しビルマ国籍保持者ないしその子孫でありながら、その後、タイに移入してきたネパール系ビルマ人、③M氏のようなネパールから直接空路で移動してきた移民 1 世、この 3 つのカテゴリーの人々がいた。しかし、彼らは、時折その差異に言及することがあるものの、基本的には「ネパール人」として自分たち自らを把握し、外に対しても「ネパール人」としての姿を見せていた。ここプーケットでも、ほぼ同様の行動が見られる。ネパールが故国であること（少なくとも父祖がネパールを故国とすること）、それを基にネパール人意識を持つこと、この両方を基盤として、彼らは一つにまとまろうとしている。その具体的な現れが「タイ・ネパール人協会」であり、その連合組織としての「タイ・ネパール人連盟」である。しかも、「連盟」は世界規模の NRN のネットワークの一部を成す。

こうした組織化の動きは、具体的には協会支部の創設と運営に典型的に見てとることができる。しかし実のところ、彼らの「ネパール人」意識を支えるのは、もっと素朴だが根強い日常的・文化的な基盤であるようにも思える。M氏の店で客が時間潰しに見るためのテレビは、客が来ない時間にはM氏夫妻の貴重な息抜きの道具になっていた。彼らがそこで見るモノは、衛星放送を通じたネパール語の番組であり、または友人間で貸し借りしているネパール映画の VCD やネパール音楽のビデオクリップを収めた DVD である。ほとんどネパール色を消し去った店内で、小さなガネーシャ神像と共に、DVD の映像は消し去ることができないネパールの色を放っていた。

参 考 文 献

- ベック, ウルリッヒ, 2005, 『グローバル化の社会学—グローバリズムの誤謬・グローバル化への応答—』(木前利秋・中村健吾監訳), 国文社。(Ulrich BECK, 1997, *Was ist Globalisierung?: Irrtuemer des Globalismus—Antworten auf Globalisierung*, Surkamp, Frankfurt)
- グハ, ラーマチャンドラ, 2012, 『インド現代史: 1947-2007』上巻, 佐藤宏訳, 明石書店。(Ramachandra GUHA, 2007, *India after Gandhi*, Macmillan, London)
- ヘルド, デイヴィッド, アンソニー・マグルー, デイヴィッド・ゴールドブラット, ジョナサン・ペラトン, 2006, 『グローバル・トランスフォーメーションズ—政治・経済・文化—』(古城・白井・滝田・星野, 他訳), 中央大学出版部 (David HELD, Anthony McGREW, David GOLDBLATT & Jonathan PERRATON, 1999, *Global Transformations*, Polity Ltd., London)
- 飯島 茂, 1982, 『ヒマラヤの彼方から—ネパールの商業民族タカリー生活誌—』日本放送出版協会。
- 高田峰夫・山本真弓, 2011, 「バンコク在住「ビルマ系ネパール人」に関する覚書」『広島修大論集』51-2, pp. 193-208。
- 安田純平, 2010, 『ルボ戦場出稼ぎ労働者』集英社。

Summary

From Nepal to Thailand: Contemporary first generation migrants

—A case of a tailor shop owner in Phuket—

TAKADA Mineo

With the progression of globalization all over the world, the movement of people across the borders is expanding widely in the terms of its magnitude and of its speed. As a result, we can find a migrant-community everywhere in unexpected form. One example of those communities is a Nepali community in Bangkok, Thailand. The author already reported on this case earlier (Takada & Yamamoto: 2010). Another ‘unexpected’ case is a Nepali community in Phuket, a resort island of southern Thailand. This paper presents narrative of a first-generation migrant in Phuket, and then try to analyze his narrative.

This essay is divided into two parts. The first part presents the narration of Mr. M, a Nepali tailor shop owner in Phuket. This part includes the sections as; 1) Short life history of Mr. M, 2) To Phuket, 3) The death of father in law, 4) To the present days, 5) Nepali migrants and their organizations, 6) Education for the children, and 7) The relationship between The Thai-Nepali Society and The Thai-Nepali Association.

The second part of this essay discusses some selected topics related to his narration presented in Part 1. The topics are as follows; 1) The role of higher education in the migration process, 2) Globalization, 3) On the management of the tailoring shop, 4) Nepal as a country of emigrants production, and 5) The route of migration and the network.